
ガンダム種、日本が第三勢力として出てくるSS【ネタ】クロス（ガンダム、マクロス、AC？）

明日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダム種、日本が第三勢力として出てくるSS【ネタ】クロス
(ガンダム、マクロス、AC?)

【Nコード】

N4024P

【作者名】

明日

【あらすじ】

この作品は作者の「SEEDの世界観は面白いんだけど、三隻同盟とかオーブとかおかしくない?」
と感じたところから、もう好きに弄くっちゃえと言っただけで心ざらに沸き行動にでました。
本当に適当なのでそうゆうの苦手な人はご勘弁ください。

一話からコンセプトである「種の存続」というものはなくなり、普

通に利益重視の戦争になります。まあ、かといって民族主義が無くなっているわけではないので、あくまで殲滅戦争か普通の戦争になっただけではありません。

1話（前書き）

当作品は理想郷にも投稿しています

1話

E70年4月1日ニュートロン・ジャマー（以後NJ）散布作戦、通称エイプリルフルクライシス（以後AFC）の作戦が今物語のはじまりとしたい。

この作戦によってNJの影響下にならなかった地域はプラント同盟関係にある大洋州連合と東アジア共和国であった。

何故この作戦に置いて東アジアを標的から外したかということ半分は脅しではあった。

共和国は元々大西洋連邦と対立関係にあり、海岸線を塞ぐ形で領土を持ち、また強力な海軍を持つ日本を基軸とした極東連合を疎ましく思っていた。

それはプラントより遥かに強烈な敵対国家ではあった。

しかし、プラントのコロニー建造の出資しているため、その費用は取り返したいし、プラントと地球国家では国力の差が圧倒的に違うため協調路線で地球連合に加わった。

そもそも開戦前は「1週間で終わる戦争」とさえ言われていたのだから、共和国は利益を優先し地球連合に加わった。

しかし、開戦から負け続けているのは地球連合軍でありMSの登場により圧倒されていた。

そんなおりプラントから共和国に地球連合を裏切るように勧められる。

東アジア共和国はNJの威力に驚き、地球連合の敗北を予感し、更にはプラント側kから参戦の見返りとして、戦勝の証には台湾国、極東連合、赤道連合、東シベリア地域の領有保障を打診された事により、地球連合から離反してプラント側へと鞍替えしている。NJで混乱していると予測をした4月2日に沖縄に侵攻を試みた。

事前準備を整えていた突如の寝返りによって、東アジア共和国軍によって背後から撃たれた大西洋連邦軍やユーラシア連邦軍も少なくはない。

ともあれ、ザフト軍は東アジア共和国軍の膨大な人的資源と、大洋州連合の海洋戦力を手に入れたことで、近代軍に必要不可欠だった後方支援態勢を手に入れたのだ。

こうした背景によって、ザフト軍、東アジア共和国軍、大洋州連合軍は地球連合軍を構成する大西洋連邦軍、ユーラシア連合軍との死闘を繰り広げていた。

唯一、評価すべき事はブルーコスモスが謳ったナチュラルとコー
ディネーターの戦争が、ナチュラルによる超大な人口を有する東ア
ジア共和国軍が敵に回ったことで、利益を巡る普通の戦争に戻った
ことである。

NJ投下と同時に仕掛けられた沖縄海戦に勝利した極東連合だった
が、世界情勢の変化が自国の注目度をあげていることに気づいた。

地球連合は裏切りに対して東アジアに対する嫌悪の感情が高まり、
その東アジアを退けた極東連合に対して好意的な目を向けている。

なおかつ、連がいいといふべきか極東連合の宗主である日本が核融
合発電所を発明しており、本来ならば全国にある発電所で試験運転
を行い、運用するつもりであった。

原子力発電をするにはウラン等を輸入しなければならず、もし戦争
になれば輸出入に支障が出る可能性が高い日本は精力的に核融合発
電の研究を進めていた。

他国もしてはいたが、自国で核燃料が取れるのだから必要以上に新
たな電力は必要ではなかった。

他の極東連合もその分野に力を入れなかった。

この核融合発電の技術を地球連合は求めた。

最新技術ゆえに洩られるかと思われたが開発責任者が

「この程度の発明なら他国が4、5年研究すれば開発できるわ。それを後生大事にしまっておくより、今の内に革新技術はブラックボックス化してパテントを高くして売るほうがとくよ。」と答えさらに

「それよりあの自称新たな人類（笑）とやらが使っているMSの戦闘映像を入手しなさい。4ヶ月よ。それで量産機の製造までこぎつけてやるわ」

彼女は自他共に認める天才、もちろん遺伝子を弄っていない純粹な天才であった。

彼女の発明は奇想天外な物も多く、日常会話やつまらないゲームから理論が飛び出すことも珍しくはない。

そのため彼女を好意的な人は「びっくり箱」と評した。

しかし、彼女は後もう一つ「東洋の魔女」という2つ名が有名になるのだがそれはまた別のお話。

1話（後書き）

東洋の魔女さんは某オルタネイティブから来て頂きました。

作者の趣味です申し訳ございません

当初、東アジアが主役の予定だったんですが、そうなるとバランスがおかしくなったり名前がなんか微妙になったりしたので書きやすさを重視で日本にしました。

チートっぽくなりましたが、今後日本が発明していくのはあくまで21世紀以後ならこれくらい発明でるんじゃないかね？ぐらいの発明です。核融合発電は出したかった物の一つでむしろこれを出すために書いたといっても過言ではありません。

作者はオーブが嫌いなのでもしかしたらアンチオーブになる可能性大です。

量産機を製造すると言つことは構想をまとめ、OSを作り試作機を作り、実用性を確認さらに安全性などのチェックをする行程を経て、やっと量産機にこぎつける。

さらに同時にパイロット育成もしなければならぬ。

『機体がないのに育成が出来るのか?』と思われるがその問題は意外なことにゲーム会社と家電メーカーが解決した。

無駄に高性能、意味の無いほど高画質といわれた日本のゲームがここで活かされることになる。

箱形のシミュレーターでパイロット気分を味わうというのはゲーム業界ではすでに定番だったためOSが完成すれば宇宙、地球のあらゆる環境を想定した訓練が行える状態が整った。

このシミュレーターの開発者は時の総理に、「一度も実機に載らなくてもベテランパイロットを育てられる物を作ってみせましょう」と豪語した。

通常なら数年はかかるプロジェクトであったが極東連合はMS開発を急ぐ理由があった。

4月2日にカーペンタリアにザフトの基地が建設され始めたことで

あつた。

極東連合はインドネシア諸島に展開する部隊の警戒態勢を引き上げた。

この基地が建設されればインドシナ半島を東アジア共和国と連携し挟み撃ちにすることが可能になる。

だからこそ極東連合は対抗手段としてMSの早期開発に乗り出した。ただ作ればいいと言うものではなくプラントに対して抑止力たり得る機体を作らなければならない。

さてここで舞台は外交の方に移動するのだが、日本の現状は東アジア共和国とは交戦状態にあり、プラントに対しては微妙な立ち位置であつた。

東アジアとは同盟関係にあるプラントだが交戦国は地球連合のみと戦うと東アジアとの条約で結ばれており、極東連合との戦争には介入義務はなかつた。

もちろん東アジアはごねたが、極東連合に対してプラントは乗り気ではなかつた。

極東連合においても即座にプラントとの戦争に移れる状態ではなかつた。

お互い将来の敵であることを認識しつつ、手が出せない状況になつていた。

いっぽう大西洋連邦との関係だが、大西洋連邦と極東連合との確執は第三次大戦いわゆる再構成戦争に遡る。

当時アジア各地と条約をかわし、軍事基地をもっていた大西洋連邦だったが、東アジア共和国との対決をさけ、これらの地域から軍を撤退させた。

東アジア共和国と何らかの密約をかわしたようだが、表向きは「国民の要望」であった。

確かに大西洋連邦では、所謂モンロー主義が台頭してはいたがアジア各国はまさか一方的に条約破棄をされるとは思わなかったためアジア情勢混乱を極めた。

極東連合、赤道連合が成立し東アジア共和国の侵攻はモンゴルと東シベリアの一部、朝鮮半島で止まったがこの時の裏切り行為をアジア各国は身に刻み込んだ。

戦後、関係改善はしていったがそれはあくまで経済部門だけであり外交・政治では敬遠の対象となっていた。

* *

MS開発は道筋が出来たがまだ問題は山積みであった。

地球連合との戦いの中で分かった事だが戦艦の対MS戦のもろさであった。

150m以下の艦船はMSの餌食にされ、大型艦船も機関部など弱点を攻撃され次々と沈んでいく。

これらの映像をみた極東連合はL1にある多目的コロニー「弥生」と中心としたコロニー群を持っておりここで航空宇宙軍の改修の準備を始める。

装甲を新たに発明されたチタン合金セラミック複合材に換装することになった。

さらに、「東洋の魔女」が作った耐熱システム【月光】が配備された。

この月光は装甲板に編みこまれた熱伝導ファイバーと熱変換発光素子によって、熱的損傷を電磁波、光の放射、という形で軽減させるという対ビーム性のアップが期待される。

宇宙すら戦場になったこの世界に置いては最も警戒するのは前時代の銃ではなくビーム兵器であった。

極東連合はこのシステムを全艦に施す予定だ。

対MS問題はそれだけではなく近接戦闘の脆さであった。

簡単に接近を許し艦橋や主砲、機関部を攻撃されている。

近接戦闘を想定した武装の追加が決定し、対MSの機動を計算に入れた防衛システムも新たに作られ上書きされる。

極東連合のことばかりでたのでここで大西洋連邦の情勢も書いておきたいと思う。

負け続きではあるが制宙圏で言えばL5とL4の半分を失っただけでありまだ戦力の立て直し可能であった。こちら辺はさすが世界最大の国家だろう。

極東連合から核融合発電の技術を買い、同時にNJの被害が少なかった日本から食料も買うことにより餓死などの被害も押さえられた。

電力の要であった原子力が封じられたため、水力発電などで得られる電気は工業の維持に精一杯だった。

ここに来て知将とハルバートンを中心としたMSを認め連合でも開発を急ぐ声が出たものの、連合内部では否定の声もあふれている。

軍とは例え有用性が分かっているとしてもいきなり兵器をしかも主力を担ってきた物を変えるのには抵抗を覚える物である。

古くを遡ればそのような事例はいくつもある。

極東連合軍内でもあったにはあったが魔女から

「あんたらのつまらない常識やら慣例のツケは前線の兵士と国民が支払う事になるのよ。今は一時も立ち止まる余裕はないの、どうす

るか今決めなさい」

と詰め寄られMS開発はスムーズに決まった。

『この時代に彼女がいなければ世界はどう変化したか』という題目は後の歴史家の中では人気の題材になるのはまた別のお話。

さて、極東連合の新規防衛システムの構築への道筋が大筋でまとまった。

この状況は各国似たような物であった。

各勢力で新たな軍事開発の方向性が纏まっていく。

しかし極東連合はここからのスピードが他国を圧倒した。

そもそも明確な目標を立ち上げると脇目もふらずそこを目指し、なおかつ実現しちゃったりしてしまうのが極東連合の宗主国である日本だったりする。

妙に発想が突き抜けた商品や技術を発表すると、「ああ、またこいつらか」みたいな目を向けられてしまったりすることは日常茶飯事である。

まあパンツが空を飛んだり、パンツをズボンだと言い張ったりするアニメを作る国だからどこか頭の構造が違うのかもしれない。

とある外国人は語る

「他国が新しい発明をすると『我が国でも作れたはずだ』という声は少なからずあがる。しかしあの国が発明したときだけは多くの場合は『何でこんな物を作ろうとした？』もしくは『何故作ろうと思

った？』という声の方が大きい」

そんな素敵なHENTAI達が住む国では技術職の方達が目をギラギラさせていた。

そうギラギラしていた。

何しろ二足歩行機、しかも大型で高性能、さらに予算たっぷり。

もうよだれを垂らさんばかりであった。

「三段変形にしてみよう！」

「いやいや、ここは水中変形モードを取り入れるべきだろう？」

「ロケットパンチは！？ねえ、ロケットパンチは必要不可欠だよ！」

といい年した子持ちのオッサン達が子供のように語り合っているのは何とも言えないものであった。

魔女から機体の構想を発表されると一喜一憂の声があがる。

しかし、技術面の話しになると皆一様に顔を引き締めた。

既存の技術と新規の技術をいかに織り交ぜるのか。

中には使い古された技術すらあった。

技術面の説明が終わると技術者は皆一斉に電話を取り出した。

家族と会社に連絡を入れたのだ。

会社には必要な機材や送って欲しい人材の使命など様々だが家族への連絡は見事に一致していた。

「4ヶ月は帰らないから」

家族からの返答は呆れやら諦めやらの声が起こり最終的には励ましの声が返る。

こうして彼らは平均睡眠時間3時間と呼ばれる国家プロジェクトに参加した。

* * *

まだ紹介してなかった国の一つである大洋州連合の事を語っておきたい。

この大洋州連合はオーストラリアとニュージーランドを中心とした国なのだが極東連合との仲はすこぶる悪かった。

いや、経済の面では良好な関係を気付いていたのだが、彼らはそもそも西洋からの流刑民が祖先であった。

オーストラリアには先住民がおりそこには部族それぞれの文化を誇

っていたがそれを西洋からの来訪者はことごとく破壊していった。

彼らは自分たちと相容れない文化を拒否した。

通常であれば軋轢を生むだろうが彼らと先住民では技術力の差が顕著であった。

その技術力の差が彼らをますます尊大にした。

それが後の白豪主義であった。

各国が人種差別と偏見から決別していった。

それらはグローバル社会において必要に責められたからだったことも大きい。

彼らもその流れには乗ったが彼らの異文化に対する拒否感は拭えなかった。

いくら鯨は捕っても絶滅しないと言っても聞かず、理屈で説明すれば感情で拒否をする。

本来公海上である南極海での捕鯨に対して軍艦を派遣して監視するなどの脅しを何度もかけられた。

それでも日本はあくまで話し合いでも解決を目指し、説得を続けた。

人種差別を臭わせるCMを流されても匙を投げなかった。

そんな関係も終わりを迎えたのが再構成戦争であった。

大洋州連合は南極大陸とインドネシア諸島の領有を目的をした軍事行動を始めた。

世界情勢の混乱で彼らの目論見はうまくいくかに思えたがそれを邪魔したのが日本であった。

インドネシアが極東連合に参加を調印し、派遣された極東連合艦隊が大洋州連合を壊滅に追いやった。

その後今までの恨みとばかりに大洋州連合の湾口や重要公共施設を執拗に壊滅させた。

この攻撃により国力の著しい低下をまねいた大洋州連合は再構成戦争後、農業国家に身をやつし宇宙産業で大きく遅れを持つことになる。

不利なことを知りつつプラントとの同盟を結んだのは宇宙産業に置いて遅れた大洋州連合には未来がない、少なくとも大洋州連合はそう判断した故だった。

* * *

ザフトはカーペンタリア湾に基地建設を開始。

地球連合はこれに太平洋艦隊を差し向けるも敗退。

しかし、ザフト側にも消耗を強いたことから戦略的には引き分けと評していると思われる。

プラントではもちろん大勝利とのニュースが流れる。

まあ従来の戦いで考えるのであれば大勝利ではあるが国力の差から言ったら100機落としても味方が一機落とされたら負ける状況では歴史的な大勝利でもない限り実質的な勝利とは言えなかったりする。

しかしプラント市民はこのニュースを誇らしげに聞いている。

人間往々にして都合のいい情報を信じたがる物である。

所詮彼らも人間であったというだけの話であった。

知能が高く、運動に優れていても銃弾を受ければ死んでしまう普通の人間である。

そのことを彼ら自身が認識できていないことこそが今大戦の悲劇、いや喜劇なのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4024p/>

ガンダム種、日本が第三勢力として出てくるSS【ネタ】クロス（ガンダム、
2010年12月30日18時17分発行